

# 高知県立坂本龍馬記念館・現代龍馬学会

私のテーマ

九反田・開成館をもっと知ろう

## 「近代日本の礎を築いた 開成館の役割とその検証」



現代龍馬学会会員  
「九反田開成館をもっと知ろう会」会長  
**井倉 俊一郎**

「開成」の意味は、ヒトモノを開く、人の知識を向上させ事業を興す。つまり今でいう産業振興政策であり、開成館は日本初の商社機能を持つ組織であります。

開成館の立地場所は「土佐藩政録」によりますと城下ニテ水ニ近キ土地ヲ選定ス即ち高知城東九反田(現在の東九反田公園)に相シとあります。

なぜこの場所かと推測しますに、この時代最大の運搬機能をもつ船舶が行き来できる場所、そして物流拠点に近い場所であったことかと考えられます。

### 検証1 鎮国日本に海外事情を初めて紹介した日本人 中浜万次郎からの学び

嘉永4年(1851年)、ジョン万次郎こと中浜万次郎がアメリカから鎮国日本に帰国。ジョン万次郎が到着した琉球を統治している薩摩藩主島津斉彬は直接ジョン万次郎を呼び寄せアメリカ事情を詳しく聞いている。

その後ジョン万次郎は嘉永5年(1852年)土佐藩、高知城下で2か月余りアメリカ事情、海外情勢を克明に説明する。そしてジョン万次郎から中浜万次郎として土佐藩の士分に取り立てられ「教授館」にて後藤象二郎、岩崎弥太郎らを教えている。

坂本龍馬は安政元年(1854年)「漂美紀略」を書いた河田小龍から直ちに中浜万次郎が体験したアメリカ事情、海外情勢を聞いている。そして山内容堂は、開成館の組織についてす



「開成館」古写真

でに幕臣であった中浜万次郎に相談している。

海外事情を中浜万次郎から直接、間接的に学び海外の脅威を感じた山内容堂、後藤象二郎、坂本龍馬、岩崎弥太郎がこの開成館のもとで海外との仕事を成していくのでありました。

太郎がこの開成館のもとで海外との大仕事をしていくのでありました。

でに幕臣であった中浜万次郎に相談している。

海外事情を中浜万次郎から直接、間接的に学び海外の脅威を感じた山内容堂、後藤象二郎、坂本龍馬から諸藩の仕事をしていくのでありました。

太郎がこの開成館のもとで海外との大仕事をしていくのでありました。

### 検証2 薩摩、長州、土佐の海外列強諸国に対抗する動き

嘉永6年(1853年)アメリカからペリー艦隊来航。翌年日米和親条約が締結され、安政5年(1858年)には日米修好通商条約が結ばれて鎮国が解かれ、海外との貿易が許されることとなる。

文久3年(1863年)から元治1年(1864年)に起きた欧米との衝突、薩英戦争、下関戦争、馬閥戦争を境に薩摩長州は近代化路線へとかじを切る。

安政3年(1856年)長州藩が大砲铸造のための反射炉を萩に建設する。

慶応元年(1865年)薩摩藩がアジア初の近代様式工場群「集成館」を建設する。そして我が土佐藩も慶応2年(1866年)海外との貿易を見据えた「開成館」を設立する。

西南の端にある見識ある外様大名であった土佐藩は海外情報をことの重要性が理解できました。しかしながら直ちに中浜万次郎が体験したアメリカ事情、海外情勢を聞いています。

坂本龍馬は安政元年(1854年)「漂美紀略」を書いた河田小龍から直ちに中浜万次郎が体験したアメリカ事情、海外情勢を聞いています。

### 検証3 開成館での仕事と 大政奉還までの軌跡

慶応2年(1866年)1月21日。

坂本龍馬、中岡慎太郎の仲介で薩長同盟の密約がなされたとの情報は土佐藩参政後藤象二郎に伝わっていた。薩長の動きは討幕に進む情勢ではあるが土佐藩としては中立を維持し、富國強兵の策で軍事力を蓄えることを後藤象二郎は山内容堂に進言する。

この時期既に殖産興業推進のための開成館設立構想が出来上がっていた。

慶応2年(1866年)2月土佐藩主山内容堂の命で「開成館」が建設されるとしたら、「開成館」は産業振興を推進する12局の部局を持つた総合商社であつた、その中でも特に重要な部局は海外との貿易を行う貨殖局。この役割は高知県産の特産品(樟脳、鯨油、和紙、鰐革など)を長崎経由にて海外に売り込みその資金で船舶、武器を購入する藩の地産外商部局であった。

薩摩藩の「集成館」が工場群であるとしたら、「開成館」は産業振興を推進する12局の部局を持つた総合商社であつた、その中でも特に重要な部局は海外との貿易を行う貨殖局。この役割は高知県産の特産品(樟脳、鯨油、和紙、鰐革など)を長崎経由にて海外に売り込みその資金で船舶、武器を購入する藩の地産外商部局であった。

土佐藩主山内容堂の考え、参政後藤象二郎の考え方とも島国日本の中でも前が大海原、後ろは険しい四国山脈に位置する土佐藩の活路を生み出すには、海路を利用して海外との貿易を図り、南洋諸島を開拓することにあつた。

この考え方は慶応3年1月後藤象二郎が開成館より長崎出張時、清風亭で坂本龍馬との初めて会談で両者と代、藩内では連絡が途絶してしまった。しかし二人とも開成館の大活躍した土佐藩人達の立派な仕事役割をもつて大々的に全国へ発信するべきだと考えますが、皆さまいかがでしょう。

来年の「志国高知幕末維新博」で幕末維新に大活躍した土佐藩人達の開成館での仕事役割をもつて大々的に全国へ発信するべきだと考えますが、皆さまいかがでしょう。

飛騰96号(平成28年7月号)の学会紙面2ページ。網屋喜行氏の発表内容中、「がんきち」とルビをとあるのは、「げんきち」とルビをの間違いでした。お詫びして訂正します。

# も面白い 今が一番! 宮川 穎一さん

京都展が終わつたとはいへ、お忙しいですね。きょうは資料返却の最中にお邪魔してすみません。少しお時間をいただいてお話を伺います。早速ですが、特別展の手応えはいかがですか。

龍馬没後150年と言っていますが、149年目である今年(2016年)が重要な年です。来年(2017年)だと、龍馬ゆかりの年ですから、各地で龍馬資料を展示したいはずなので、ここまで多くの史

## 特別展覧会への思い

関係者の間で“京都の宮川さん”と言えば、龍馬研究第一人者のこの人。その宮川穎一さんは、昨年10月から京都国立博物館(京博)を皮切りに開催している特別展覧会「龍馬没後150年 坂本龍馬」(京博・読売新聞社等主催)の企画担当者である。京博での特別展は、44日間の開催期間中に9万8500人の入館者で賑わった。

京博所蔵の龍馬資料(国指定重要文化財)をはじめ、龍馬の佩刀やバーカス事件で斬り合った刀の展示など刀剣愛好家たちの話題にも上り、「龍馬の翔けた時代」(2005年)を上回る展示資料と入館者数を記録した。

また、この「飛騰」の中にある現代龍馬学会の連載エッセー「犬歩棒当記」(犬も歩けば棒に当たる記)ではあらゆる角度で龍馬を語っており、最近それを含めたものが『霧島山登山図』は龍馬の絵か?—幕末維新史雑記帳』(教育評論社)として発刊された。

京都での特別展終了後、宮川さんは資料返却と次の長崎展の準備に追われていた。先月来高した宮川さんに高知県立歴史民俗資料館でインタビューした。

料を集めることは難しいです。なにしろ、龍馬の手紙のほぼ半分、70通ほどの原資料を展示しましたからね。高知の関係者にもすいぶんお世話になりました。準備のために3年くらい通いました。

おかげさまで、11年前の特別展『龍馬が翔けた時代』の2倍近い方にご覧いただくことができました。この11年の間に龍馬研究は進んでいますから、そういう意味でおいタイミングです。

私も今回の京都展に2回出かけましたが、それでも見切れないほどの内容。人が多くて見られない資料もありましたものね。さすが国立博物館、いえ宮川さんだからこそこの展覧会でしょうね。展覧会開催の原動力になっているものは何ですか。

まあ、各地のご協力は大きいですね。龍馬記念館はじめ日ごろからのおつき合いがあるおかげで、気兼ねなく資料の相談ができるところはありがたい。私は細かく計画的でないところもあるんですけど、大きくはキチンといくんですよ(笑)。龍馬的というんでしようか。

でも、根本には龍馬の良さを伝えようという強い思いが力になっています。

## 龍馬の手紙を読む愉しさ



## 考古学から龍馬研究へ

私は大分県宇佐市安心院町で生まれました。小学生の頃は野山を歩き回って土器や石器を拾っていましたよ。父は中学校

——宮川さん言うところの“龍馬の良さ。とは何ですか。

龍馬はいいですね。なんといつても手紙の表現が好きです。

大人になつても乳母の話をして、周囲に笑われている。宴会のときなんかにそんな人がいますよね。ちょっと自虐的な笑いを取つて、それがまた愛情表現につながるっていうような。

例えば龍馬が姪の春猪に宛てた手紙のひとつ。年代が書かれておらず、もともとは慶應3年1月20日だと言っていたのですが、私は前年の1月20日、つまり薩長同盟が結ばれた前日のものだと発表しました。姪をかなりからかう内容になっています。お前の“あばた顔”を金平糖の鋳型に入れよとか、男という男が逃げ出すとか散々です。そうかと言えば、精出して長い人生を送れという。溜めてたストレスを姪に向かつて吐き出し、解消しているかに思えます。

——手紙を読み込んでいる宮川さんならではのコメントですね。そうそう、龍馬の手紙に最も多く出てくるのは「はからずも」という言葉だとか。

そう。「はからずも」ですよ。我々の人生は計画的に行くわけではなく、予想通りにはならない。もちろん悪いことだけでなく良いこともそうです。

私もまさか坂本龍馬さんとこんなおつき合いをするようになると、子どもの頃には思つてもいませんでしたからね。



# 話題人 インタビュー

# 龍馬も考古

京都国立博物館上席研究員



特別展覧会  
没後150年  
坂本龍馬  
moto

龍馬の手紙  
近江屋

近江屋  
Sakamoto Ryoma, Jr.

龍馬がゆく  
おーい！龍馬

時代の研究ですが、龍馬研究は文章によって人間心理に向かうような研究で、手法がまったく異なります。

担当者になつて、龍馬が暗殺時に居た「近江屋」四代目の井口新助さん（故人）から同家に伝わるお話を聞いたり、新しい龍馬の手紙に接したりするようになり、龍馬に対する興味がわいてきました。

また、昭和初期に坂本家や井口家から寄贈された龍馬資料は、以前は今ほど注目されていませんでした。その龍馬資料を、湯山賢一先生（現在、奈良国立博物館長）のアドバイスもあって文化庁に申請し、1999（平成11）年に国の重要文化財に指定されたことなども、

人の人生なんてひと言では語れませんよ。人間とは何か。歴史とは何か。自分がどんな人か。それは遺跡の発掘と同じでどうな（笑）。

私も龍馬の手紙は文学的に優れていると思います。龍馬をひと言で語れないように宮川さん自身もどこかとらえようがない（笑）。龍馬と似ているのかな。

型にはまらない文章の流れ、ハッとした、ふと思った。そんな言葉に「なるほど」と思うわけです。

龍馬には、漢詩のような定型化したものにはない「あわれ」や「かなし」といった感性や情緒があります。また、主語と述語がない「牛のよだれ」のように続く日本語特有の文体が面白い。言文一致ではない候文の妙味がありますね。現代語訳をしていて詰まることもありますが、日本語の良さを感じます。

龍馬の奥底にあるウエット（情的）な部分かな。

龍馬には、漢詩のような定型化したものにはない「あわれ」や「かなし」といった感性や情緒があります。また、主語と述語がない「牛のよだれ」のように続く日本語特有の文体が面白い。言文一致ではない候文の妙味がありますね。現代語訳をしていて詰まることがあります。しかし、龍馬の手紙は文学的に優れていると思います。龍馬をひと言で語れないように宮川さん自身もどこかとらえようがない（笑）。龍馬と似ているのかな。



インタビュアー  
前田由紀枝

現代龍馬学会理事  
高知県立坂本龍馬記念館学芸課長

京都国立博物館上席研究員、列品管理室長兼考古室長。  
1959年大分県宇佐市生まれ、京都市在住。  
京都大学大学院文学研究科修士修了（考古学専攻）。

宮川 権一（みやかわ・ていいち）  
京都国立博物館上席研究員、列品管理室長兼考古室長。  
著書「龍馬を読む愉しき」（龍川書店）、「全書簡現代語訳・坂本龍馬からの手紙」（教育評論社）ほか。  
特別展覧会「没後150年 坂本龍馬」は現在長崎展開催中。その後東京、静岡へ。

長で理科が専門。兄も理系でしたが、私が文系です。小学校5年生のときに読んだエジプトの「ツタンカーメン王の秘密」をきっかけに歴史をやろうと思いました。中学校は陸上部で、2年生のとき100mハードルで県大会2位の記録もあります。エヘン（笑）。

考古学専攻の過程がよく分かりました。その宮川さんがなぜ龍馬研究へ向かうのですか。

中津南高校時代は郷土研究部の部長で、近くの山で弥生土器を採取していました。京都へ行けば、古刹もあって歴史を学べると京都大学へ進学して考古学を専攻したのです。卒業後は兵庫県西宮市にある辰馬考古資料館の学芸員として10年間韓国など東アジアの陶質土器などの研究をし、1995年から京都国立博物館で勤務しています。

はからずも、ですな（笑）。京博に就職して、たまたまま龍馬資料の担当となつたのですね。それまでは『龍馬がゆく』『おーい！龍馬』を読んでいた程度でした。

考古というのは文字のない

担当となつたのですね。それまでは『龍馬がゆく』『おーい！龍馬』を読んでいた程度でした。

龍馬の奥底にあるウエット（情的）な部分かな。

龍馬も考古もどちらも面白い。これからも一生つき合っていきますよ。そして、波乗りと同じで「今」が一番いい時ですね。

私は尽きませんが、宮川さんにとつて龍馬研究と考古学どちらが面白いのか。また、一番良かつた時はいつなのでしょう。

方言があつて、ちょっとへそ曲がりな人のことを言います。京都生活が長くても、そんな県民のつて何でしょうか。

20年の歳月を龍馬とつき合っている宮川さんにとって、龍馬の手紙と対話して聞こえてくる声、感じるものつて何でしょうか。

故郷大分に「げつてん」という方言があつて、ちょっとへそ曲がりな人のことを言います。京都生活が長くても、そんな県民の氣質は消えないと思いますね。

今につながっているのでしょうか。

初めてに言つたように、私は理系の父と兄がいる次男坊で、龍馬も次男。龍馬の手紙にもあるように、弟は「ハイハイ」というように人の話を真面目に聞いていない部分がある。でもいい加減ではありません。

## 「ひねりが効いている」

宮川 順一

坂本龍馬の手紙表現で面白いのは時々自虐ネタが見られることだ。慶応元年9月9日の池内蔵太家族へ宛てたもの(鴻池合資会社蔵)では自分の乳母のことについて「時々人に言いい、またウバが出たと笑われております」との奇妙な表現が見られる。これは脱藩後、土佐人らとの宴席で故郷の話題になつた時に「ところで俺の乳母つて元気かな?」などと龍馬が突然言い出すので、「30歳にもなつてまだ乳母のオツパイが恋しいのか」「また龍馬が乳母の話をしているよ」などと皆にからかわれている、という意味だ。もちろん乳母への愛情・気遣いをこのようにひねった形で表現したものであり、笑わせながらもその伝えたい意図は確実に乳母本人へ伝わつたはずだ(池内蔵太の家族は坂本家と懇意なので)。龍馬の表現のうまいところである。乙女姉さんに対しては「乙女の名前はこの頃全国的に有名ですよ。龍馬より強いといふ評判なり」(慶応元年9月9日・乙女・おやべ宛・京博蔵)というのもある。龍馬が有名になるにつれ諸藩の人間が土佐人に「坂本龍馬さんは北辰一刀流の達人だそくですな」といって、「いいやいや土佐には龍馬さんよりも

もっと剣の強い人がおりますぞ」「ええ? それはいつたいですか」「龍馬さんに剣を教えた乙女さんというお姉さんじゃ」などという笑い話である。これもかなりひねりが効いている。冗談ではあるが乙女姉さんも悪い気はしなかつたはずだ。誰ですか」「龍馬さんに剣を教えた乙女さんというお姉さんじゃ」というお姉さんです。



特別展覧会のチラシ

## コラム・龍馬のこと

### 「時代が変わってもやっぱり“龍馬”」

現代龍馬学会理事 竹内 土佐郎

自から平等で平和な民主主義国家建設のために奔走し、新しい国づくりに道筋をつけ、その現実を見ることなく無念にも道半ばにして風となった龍馬。

私が、龍馬という名を知ったのは、小学校(5、6年生の時。昭和29年頃)である。

当時、どさ回り的に活動写真(映画)が我が村にやって来た。この活動写真の題目は忘れたが、龍馬に扮する坂東妻三郎、慎太郎に扮するのは誰だったか分からぬが、近江屋で数人の刺客に襲われ惨殺された映画であった。

その後、明治2年生まれの祖父は、その映画は「坂本龍馬と中岡慎太郎が世直しのことについての話をしているところを襲われたのだ」と話してくれたことを覚えている。それに加えて「龍馬は、安田の高松順蔵さんのところへ度々来ていたようだ」ということも聞かされた。このようことで子ども心に坂本龍馬という人物に親しみを覚えたものであった。

龍馬は、倒幕のため長州と薩摩の両藩を連合にとりつけ、土佐藩の参政後藤象二郎を動かし将軍に大政奉還へ向かわせる。諸藩の倒幕への勢いが増す中、幕府は四面楚歌の如くになりつつも龍馬の言動が疎ましく謀殺する。

龍馬は武力による争いを避け、身分差別のない自由で平等、平和な国家を目指すも叶わず逝ってしまう。

龍馬の自からを信じ、その信念による国家づくりのスピリットはいつまでも人の心の中に生き続け輝くことであろう。その証しは、全国に龍馬を敬慕し多くのファンが没後、150年も経った今も絶えることなく、坂本龍馬記念館に足を運んでくれているからである。

来館者が10万人にわざかに届かなかつたことを少し残念に思つてゐるのだが、筆者なりの表現で言うならば「あと1,500人。10万人来てくれていたら『展覧会の良し悪しつていうのは入場者数の多い少ないじやないよね』と言えたのに、と悔しがつています」である。この表現はすこしひねりすぎであろう。

さて、京都国立博物館では平成28年秋に特別展覧会「没後150年 坂本龍馬」を開催させていただいた。入館者の合計は98,500人であった。読者の中にもわざわざ京都までお越しくださった方もいらっしゃるだろう。厚く御礼申し上げる。

## “話してみるかよ”

### 「ぼくらの平和活動『世界に平和の折り鶴を送ろうプロジェクト』」

高知市立一ツ橋小学校PTA会長 仁井田 恵子

私たち親子が平和を意識したのは2年前の「子ども・龍馬フォーラム」で、ひろみビーターソン先生の「サダコプロジェクト」の話を聞いてからです。その時は、自分たちがピースビルダー(平和を作る人)になるなんて思ってもいませんでした。

しかし、突然“その時”がきました。それは、親子でパリ同時多発テロのニュースを見ていた時に、息子は怖くて悲しくて、「戦争が起したらどうしよう。僕に何かできることは?」と言いました。私は「平和の折り鶴を作つては?」と提案しました。

すると息子は友達を誘い、校長先生に相談に行き、平和の折り鶴を世界に届ける「平和実行委員会」を立ち上げました。皆で1,244羽の鶴を折つてハワイに送ると、ひろみ先生はパールハーバーにあるアリゾナ記念館の来館者に配つてくれました。そのことで息子は、やってよかったです。でも、もっと多くの人に鶴を送り平和を訴えたいと思ったのです。

しかし、昨年は声をかけても人が集まらず、「僕は独りぼっちや」「休み時間にしてもうのが悪いき、もうえい」と孤独感と諦めの言葉を口にするようになりました。私は「一人でやつても意味がない。皆でやつてこそ意味がある」と、エールを送り続けました。

すると最初は50羽だった鶴が延べ200人の友達の協力で1,400羽の鶴が出来上がったのです。そこで私たち家族は、6月にハワイに行って直接手渡しすることにしたのです。

息子は自分の言い出しに周りが必死に動いてくれたこと、優しさという気持ちの力と、仲間を信じることの大切さを知り、パールハーバーでは、言葉が通じなくても平和の気持ちを通じることを強く感じました。私は、子どもが未来へ向かうエールの引き出しを持っていてよかったとつくづく思いました。